

2021年8月発行



CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 59

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

アフガニスタンにて 緊急人道支援を開始 しました

アフガニスタンの最も貧しい県の一つである
バーミヤン県では、昨年からの新型コロナウ
イルス感染症（COVID-19）に加え、気候変動
による干ばつなどの被害や紛争の激化による国
内避難民およびイランやパキスタンからの帰
還民の流入により、人道的ニーズが一層高ま
っています。その中でも、特に食料へのアク
セスが難しくなっています。

国内避難民や帰還民、女性が世帯主の家庭、
高齢者や障がい者のいる世帯など、脆弱性の
高い層への人道支援は行き届いておらず、彼
らに対する支援のニーズは増加しています。

CWS Japanは、このような脆弱な世帯の緊急
的なニーズ、そして気候変動に伴う中長期的
なニーズに対応するため、家畜を提供するこ
と、災害リスク軽減活動に参加した人々に現
金を提供するキャッシュネットワーク、そし
て気候変動への適応を視野に入れた農法研修
を実施する予定です。

これらの活動を通して、対象地の人々が家畜/
家庭菜園の管理方法と気候変動対応農法を習
得し、各世帯の食料へのアクセスが改善する
こと、そして、災害に対する対象コミュニテ
ィのレジリエンス（防災力）が向上すること
を目指しています。

OUR SNS IS ACTIVE!

FACEBOOK

TWITTER

INSTAGRAMでも
情報発信しています!

最後のページを
ご覧ください



写真

支援対象地では家畜（羊）の糞、羊
毛、ミルクは現地の人々の生計や食事
を支える重要な資産になり得ます。

なお、今月から約1年間の事業となりますが、活動の進捗をNLでも随時お伝えしたいと思います。

インターン紹介

皆様はじめまして、清野 量（せいのりょう）と申します。現在、東京都町田市にありす農村伝道神学校の4年生として、在籍しながらも、CWS Japanでも学ばせていただいております。

私は大学時代、北海道にありす酪農学園大学で環境学を学んでおりました。大学では環境学だけではなく、国際関係学なども学びました。また大学での特別公演などでは、宗教主任の先生が一昨年に亡くなられた中村哲医師などを特別講師として、招いてくださっていたので、人道支援などについても興味を持つようになりました。

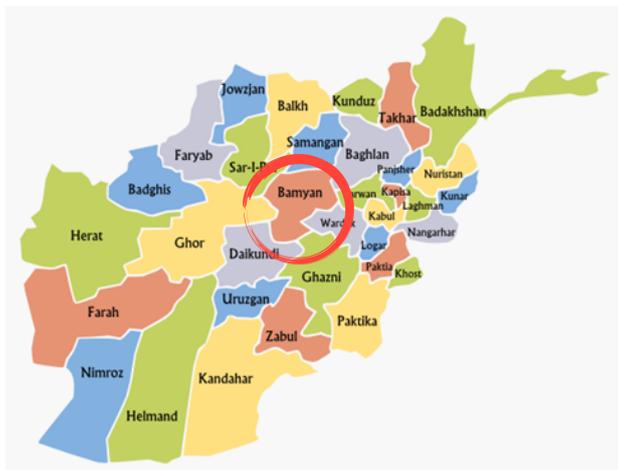
CWS Japanでは本当に弱い立場の人々・小さくされた人々のために、本気で取り組んでいる方々がたくさんいらっしゃるの、本当に色々な意味でたくさんの刺激を受けております。

現在は滞日外国人など災害弱者になりうる可能性が高い方々への支援を目指して、災害時に支援を提供するための拠点作りを目指しています。首都圏の個教会や支援団体への訪問・取り組みの説明などに同行しながら学んでいます。

どうぞよろしくお願いいたします。



写真
インターンとして活躍中の清野さん



アフガニスタンの地図
赤丸で示した対象地のバーミヤン県は
同国の中央山岳地帯に位置する。

また、当会ホームページやSNSでもお伝えしておりますが、各種報道によりますと、アフガニスタンではタリバンが急速に支配領域を拡大し、8月15日には首都のカブールに入り、全権を掌握したと発表しました。

多くの市民への被害も伝えられており、先行きが見えないなか、女性たちを始め多くの市民が恐怖と不安の中にいます。CWS Japanは現地パートナー団体と常時連絡を取り合い、彼らの無事を確認しています。

私たちは、今後も現地パートナー団体と連絡を取り続け、彼ら及び関係者の安全確保に努めると共に、この危機下において、最も支援を必要としている人々への支援を継続していきます。

皆様の温かいご支援とご理解いただけますと大変幸いです。

※本事業はジャパン・プラットフォーム（JPF）の助成により実施しています。

（文：プログラム・オフィサー 西澤紫乃）

STORY WITH OUR PARTNERS

-パートナーの声

2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年が経ちました。

CWS Japanはそこから10年間、ともに活動する仲間を増やし、多くの方々のご支援とご協力、温かいお言葉に支えられながら、国内外の災害・防災支援に携わることができました。その活動の多くは、わたしたち単独でできるものではありませんでした。

当時から現在に至るまで、わたしたちがこだわっているのは「パートナーシップ」です。

今後も、同じもしくは他のセクターで活躍されているパートナーとの連携やネットワーク構築を通して、災害時に支援の手が届かず取り残される人々のいない社会の実現を目指していきます。

そのために、この10年という節目を迎え、これまでのわたしたちの活動によるインパクトを客観的に振り返るとともに、今後の活動に向けて、改善課題を抽出すべく、何名かのパートナーの皆様へインタビューをさせていただきました。

パートナー団体から聞くCWS JAPANとの歩み

VOL.4

インタビュー相手：松尾沢子 様
(支援の質とアカウンタビリティ向上ネットワーク(JQAN)事務局 責任者)



—CWS Japanを知ったきっかけはなんですか？

東日本大震災から半年経ったころにCWS Japanは被災地や東京でパートナーミーティングを開催されていました。CWS Japanとそのパートナー団体、その他災害支援の中で接点がある団体間で意見交換をする場となっていた中、支援団体の能力強化（キャパシティビルディング）がテーマになった際に、中間支援組織である国際協力NGOセンター（JANIC）のNGO能力強化の担当者として参加したのが、CWS Japanを初めて知ったきっかけでした。

—CWS Japanと連携して良かったことはなんですか？

当時、東日本大震災という未曾有の災害にどのように国際協力NGOは対応していくのか、またそのネットワークであるJANICの役割はなにか、と考えていました。支援活動の長期化が不可欠な中、支援団体のキャパシティビルディングが大切だというメッセージをCWS Japanからいただきました。CWS Japanは世界各地の災害支援において重視されていた「支援の質とアカウンタビリティ」を重視し、日本のNGO/NPOセクターが具体的にこれを実践するための取組を展開されました。

例えば2011年の秋には「人道支援の説明責任(アカウンタビリティ)と品質管理(クオリティ)に関するHAP基準2010」の翻訳、普及活動に欠かせないトレーナー人材の育成のために人道支援の国際基準として最も広く普及しているスフィアハンドブックなどに関するトレーナー養成研修を2012年から3回開催されました。JANICはこれらの活動を共に進めることで、従来のJANICの機能を活用した災害対応の活動のあり方を見出し、また日本の支援団体が国際基準を学び、東日本大震災以降の現場で実践していくことにつながることができました。

日本のNGOの足りない部分や改善したいと考えている分野の把握から始まり、それを改善するための提案、予算の確保、自立的に推進するための仕組みづくりなど、CWS Japanが実施した一連のキャパシティビルディングに関する積極的介入については、その後の私自身の案件形成やネットワークの作り方で参考にさせていただいていますし、JOANはCWS Japanの存在なしには語れません。災害対応やキャパシティビルディングの経験が豊富にあり、被災地（支援対象となる現地）では本当に必要とされるものが何か、あるいはどのような視点・発想で現場に立つべきか、ということを知っているからこそ、同様の取り組みが日本でもできたのではないのでしょうか。

"いつ自分も被災者になるかもしれない状況だからこそ、人としての尊厳や権利を守りたいし、守っていきたいと思います"

一防災支援・緊急人道支援で大切にしている貴社のアプローチや課題を教えてください

個人の尊厳と権利の保護の実現を大切にしています。自然災害が多い日本（の団体）は支援現場に行くだけでなく、支援の受け手にもなる可能性があります。

いつ自分も被災者になるかもしれない状況だからこそ、人としての尊厳や権利を守りたいし、守っていきたいと思います。そのためにあらかじめ他者をつなぎ、社会の仕組みの中で支援が提供される状態づくりが大切と考えます。キャパティビルディングと一言言っても具体的には様々な要素・側面から取り組むことが必要となりますし、結果が出るまでには時間がかかります。そのため、JOANでも仲間を多くつくり、共に継続的に取り組むことを意識して進めていきたいと考えています。

一CWS Japanへのアドバイスや今後期待することはありますか？

CWS Japan設立から最初の5年くらいは東日本大震災が主な活動のターゲットだったかもしれませんが、その後も様々な国内災害に出動し、活躍しているのを目にしています。他の災害対応団体と比較すると、規模は小さい団体であるにも拘わらず、これだけ多くの災害に対応できているのは、前身から有するネットワークを活かし、被災した現地のパートナーとの関係性を大切にして、現地の資源を活用できているからではないのでしょうか。2018年の西日本豪雨の災害対応は好例で、これは近年、支援の国際的潮流になっている支援のローカライゼーション（現地化）のモデルケースと言えると思います。全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)のような、日本国内で災害対応を実施する団体や機関が多く参加する場所に積極的に関わり、CWS Japanの認知度を上げることで、CWS Japanのこれまでの取り組みが他の日本の支援団体に普及されていくことを期待しています。

*「支援の質とアカウンタビリティ向上ネットワーク(JOAN)」は、質が高く、受益者に対してアカウンタビリティを果たす緊急人道支援の実践に向け、スフィアをはじめとした国際基準の普及などに取り組むネットワークです。CWS Japanも幹事団体として設立から関わっています。JOANの紹介やスフィアハンドブックのダウンロード、研修の案内はJOANの>>[ホームページ](#)<<をご覧ください。



インタビュー相手：泉貴子 様

(東北大学災害科学国際研究所
国際防災戦略研究分野 准教授/
環太平洋大学協会 (APRU)
マルチハザードプログラム ディレクター)

ーCWS Japanを知ったきっかけはなんですか？

一番最初にCWSの事を知ったのは、2008年に実施したThe Global Network of Civil Society Organisations for Disaster Reduction(GNDR)のViews from the Frontlineという調査プロジェクトでした。その時、私はMercy Malaysiaとthe Asian Disaster Reduction and Response Network (ADRRN)としてアジア地域の調査のとりまとめをしていて、(CWS職員の)小美野さんと知り合いました。その時はCWSアフガニスタン事務所に居られたと思いますが、その後バンコク事務所やCWS Japanに移籍されても協働が続きました。正直、日本人の方でアフガンやパキスタンで防災の仕事をしている人に会ったのは初めてでした。私は東日本大震災後、2013年に日本に戻り東北大学の災害科学国際研究所で働き始めましたが、CWS JapanさんにはNGOの防災の取り組みや東日本大震災支援の取り組みを教えてくださいという事でサマースクールにも登壇して頂いています。

ーCWS Japanと連携して良かったことはなんですか？

現在、東北大学の災害科学国際研究所に属し、APRU(環太平洋大学協会)のマルチハザードプログラムのディレクターをしていますが、大学間の連携や学生との学びの場で感じるのは現場の様子を知る機会がないという事です。研究者は常にデータや文献と向き合っていますが、時に自分達のやり方、モデル、理論が全てに当てはまると考えてしまう節もあります。防災や人道支援はそうではなく、現地を知ってフレキシブルに変えなきゃいけない所が多いですよ。実際の現場で知識を使おうとしても、それだけでは通じない事もありますし、事前に現場で起きている事を知る事は大事だと考えています。なので、サマースクールやウェビナーなどで現場の体験を話してもらい、学生にとっても目から鱗のような感じで教育の深化に繋がっています。もちろんNGOと学術の連携では、新しいやり方を開発する協力もあると感じます。CWS Japanさんは、現場経験が豊富でトップレベルで国際的なNGOセクターで活躍されていますので、いつも登壇依頼をさせてもらっています。

ー防災支援・緊急人道支援で大切にしている貴社のアプローチや課題を教えてください

以前NGOに居た時は、直接現場に居て活動が出来ていましたが、現在は学術という立場で、前ほど現場へのアクセスをする事が難しく、それがもどかしいと感じることもあります。現在、マレーシアでコミュニティ防災プロジェクトを実施しており、将来的にコミュニティ主導で防災活動ができるようになるメカニズムを確立することを目指しています。実は、防災をトップダウンでやっている国がまだまだ多いのが現状です。そういう国では住民の経験が十分に活かされておらず、住民が参加する事によって防災活動の効果が上がることを分かってもらう事業にする事が重要だと感じています。

研究者の役割としては防災のサイエンス、例えばモデリングなどの技術を活用したりしますが、でも基礎的なデータが足りない事が大きな課題です。データを平時から取っておく事が重要ですが、データに予算をかける事が出来ていない国も多く、データを取っていても開示していない所もあります。データは活用されてこそ意味があります。例えば、災害リスクの予測など、データをうまく活用すればこのような効果があるという事を知ってもらい、サイエンスがベースになれば、より良い計画、戦略につながるという事を普及していきたいです。

日本の防災経験を伝えようとしても、例えば日本が使っているハザードマップは作れない、また、これまでの洪水による浸水地域の公開や警戒区域設定は難しいと言われてたりもします。日本では、一般市民のイニシアティブで防災活動が行われていたり、コミュニティ主体の訓練が行われていますが、そういう市民参加型の活動はあまり実施されていない国もあり、国によって受け取られ方も違います。日本の防災活動をそのまま踏襲するというよりは、臨機応変に、それぞれの状況、国、地域にあったアプローチで最適な防災活動を、皆で議論しながら防災に取り組んでもらう事が重要だと思います。そのためにも、住民の参加は欠かせません。

"日本の中でNGOという地位を確立し、海外で国際支援のプロとして活動しているという点をもっと社会に知ってもらう必要があると感じます"

—CWS Japanへのアドバイスや今後に期待することはなんですか？

日本のNGOで、国際的に活躍できている団体はそう多くないと感じていまして、是非そういう団体としてのリーダーシップを期待しています。日本は寄付文化があまり根付いておらず、NGOが育ちにくい風土がありますよね。海外での支援活動の現場では、欧米の規模の大きなNGOが中心となって活動を行っているというイメージを持たれる方が多いと思います。それを打破する為には、日本の中でNGOという地位を確立し、海外で国際支援のプロとして活動しているという点をもっと社会に知ってもらう必要があると感じます。NGOだけではなくて、我々の意識も変える必要がありますし、その為の材料を与える存在となって欲しいです。海外ではJICAがよく認知されていますが、日本の支援はJICAだけでなくNGO支援もあると伝えたいですよね。

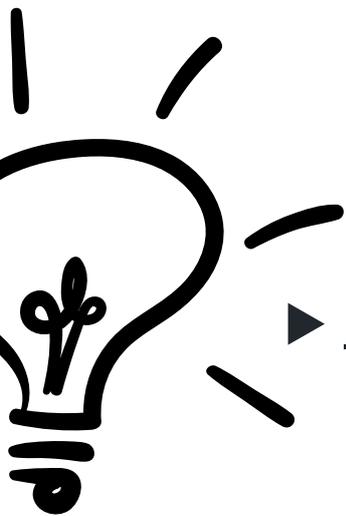
例えばハザードマップも色々な国で求められています。特に住民にどう落とし込んでいくかが課題であると感じます。CWS Japanがアフガニスタンなどの難しい現場でもそういう活動に取り組まれている所、そして日本は防災に敏感ですし、日本の知見も役に立っているという所もどんどん宣伝してもらおうと共感ポイントとなると思います。アフガニスタンなど長らく内戦で苦しんでいる所は防災が優先分野にならない傾向にあるので、政府任せでは難しく、NGOが居るからこそ、防災を含めた開発になるのだと感じます。NGOが居ないとそういう動きに絶対ならない。アフガニスタンの様な困難な現場で、支援を長く届ける事が難しいか知っている人は少ないですが、CWS Japanさんはそういう現場で防災に取り組んでいる。だからこそすごいと思いますし、是非長く続けて頂ければと思っています。また、パートナーシップによって技術やサイエンスと現場を掛け合わせ、Build Back Betterを実践している所も素晴らしいと思っています。

"人々が取り残されている現場からの声も聞きたいですし、そこからのアドバイスも欲しいと思っています"

また、大学でもSDGs教育が進んでいます。SDGsの17の目標と、大きな理念でもある「No one left behind」という目的がありますが、この目的の部分へのフォーカスが十分でない気がします。難しい課題で、どの社会でも取り残されている人たちが多く、それを変えるという事は、既存の社会の仕組みに目を向ける事も重要です。そんな中、SDGsの進捗を17の目標に合わせてだけ測っているのが正しいのか、17の目標を達成したらより良い、つまり理想的な社会・世界が達成できるのか、疑問に思っています。だからこそ、SDGsの目的の部分に焦点を当てる必要があると思っていて、これは特に途上国ではNGOの皆さんの力がないと絶対出来ない点だと思います。私自身以前NGOにいたので、その経験から「貴方たちがいないとだめなのよ」と常に思っていますね。人々が取り残されている現場からの声も聞きたいですし、そこからのアドバイスも欲しいと思っています。是非そういった動きを主導して頂きたいと思っています。

松尾沢子様、泉貴子様、インタビューへのご協力ありがとうございました。

今後、インタビュー記事を定期的に皆様にお届けしたいと思っておりますので、是非ご高覧ください。



▶ こちらをクリック

これまでのインタビュー記事は
CWS Japanのウェブサイトにも
掲載しております。

特定非営利活動法人CWSJapan

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館25号室

メールアドレス:

public@cwsjapan.jp

電話:

03-6457-6840



CWSJapan



@Japan_CWS



cws_japan